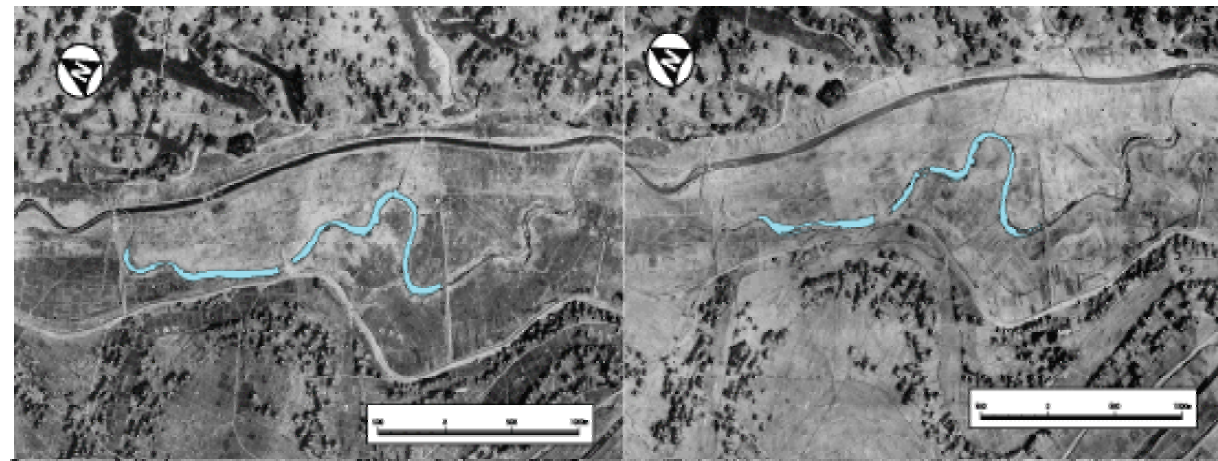


7. 太郎右衛門自然再生地における課題の整理

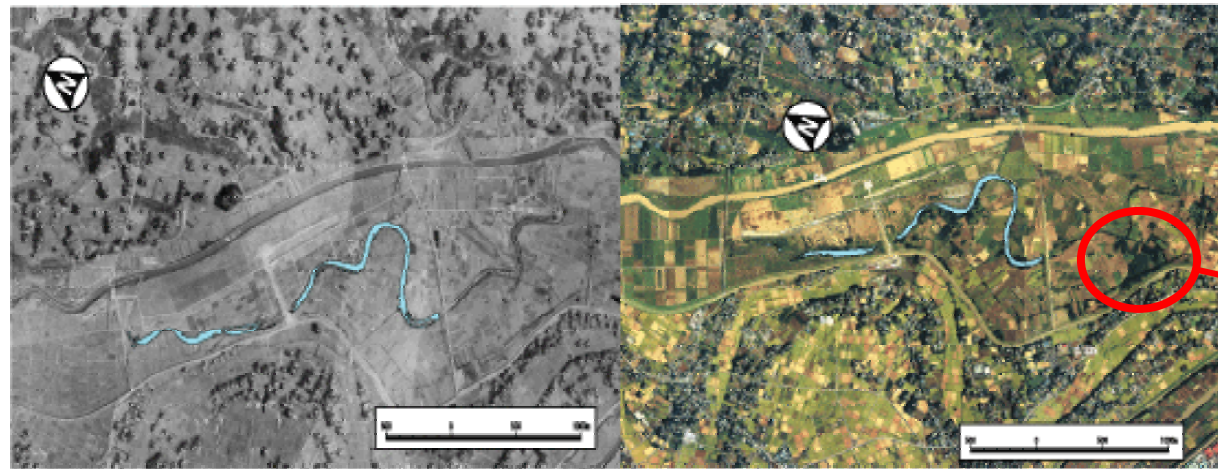
7.1 自然環境の変遷

下の写真に見られるように、再生地に3つの池ができて以来、開放水面は減少傾向にあり、湿地が乾燥した環境に変化してきている。また、昭和20年から30年代までは田畑として利用されていたが、昭和40年以降、休耕田が増えるに従って、河畔部や休耕田部分に樹林地が発達してきたと考えられる。しかし現在それらの樹林は、高木・壮齢樹化し、氾濫原を特徴付けるミドリシジミが生息するハンノキの若齢樹やタチヤナギなどの低木樹が減少している。



昭和20年代

昭和30年代



昭和40年代

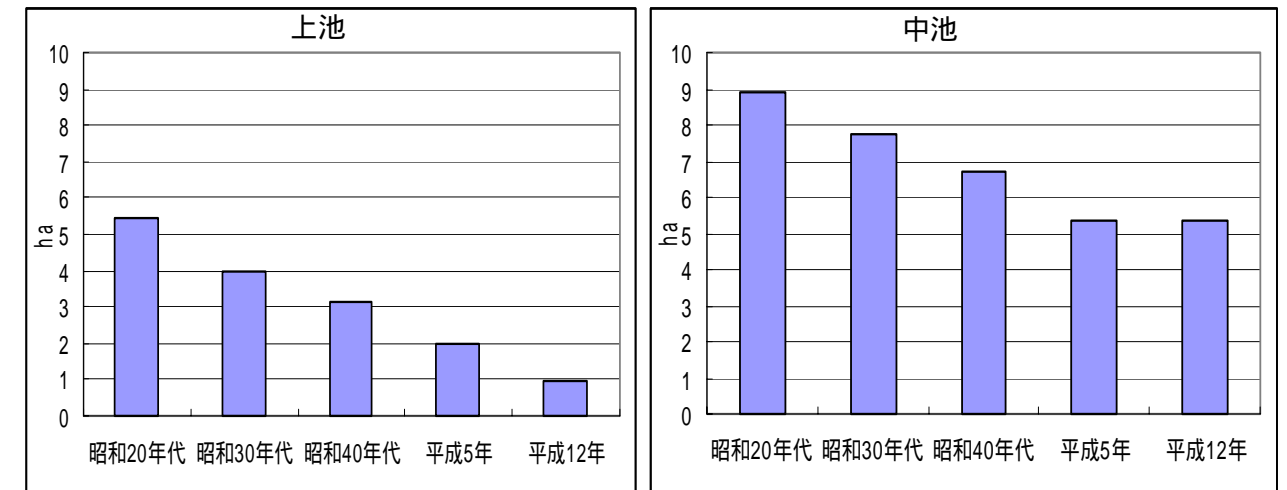
平成5年



平成12年

太郎右衛門自然再生地は昭和40年代まで田畑としての利用が盛んであり、樹林地は少なかったと推測される。しかし、現在、周辺の休耕田及び河畔には、ハンノキ、クヌギ、竹林といった樹林地が発達している。
また、池部分はヒシなど浮葉植物が繁茂する水面が減少し、ヨシやガマといった抽水植物に覆われる部分が増加してきている。

開放水面の減少



空中写真から開放水面を推定し(水色着色部分)面積を求めた。
開放水面は減少傾向にあり、太郎右衛門橋下流部の旧河道は特に著しい。

図-7.1. 旧河道の開放水面の変遷

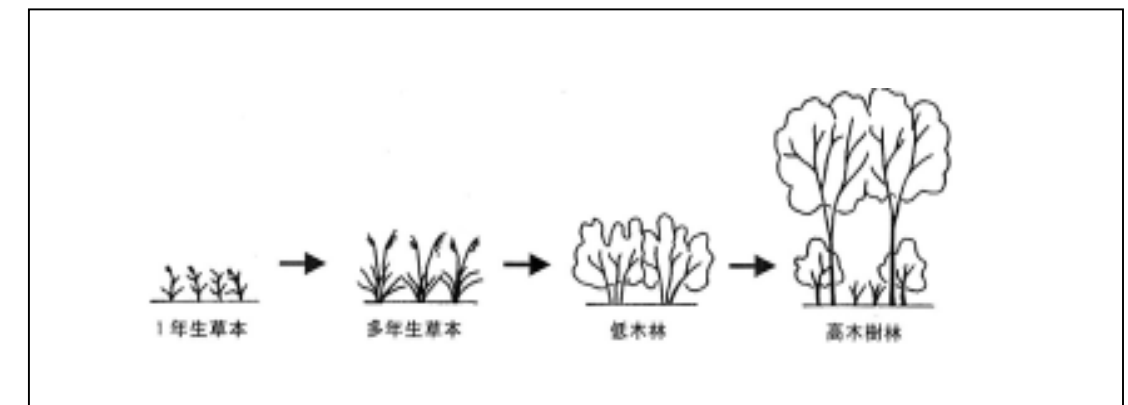


図-7.2 植生遷移の模式図(佐々木1996年 改変:ピオネットワーク計画検討)